

## エレクトーン事始め - I

### —幻のエレクトーン (EO No. 5A) から見えるエレクトーン音楽の今—

◎阿方 俊 ◎鱸 真次(DVD)

エレクトーン<sup>註1</sup>第1号の発売は、約60年前の1959年12月(昭和34年)に遡る。しかしその前年、幻のエレクトーンともいえるヤマハ電気オルガン「EO No.5A」が200台製造されて、記者発表まで企画されたが、結果として発売できなかった。

昨年2月、エレクトーン史確認のため、この楽器開発の唯一の生き証人である鱸 真次氏(94歳)を浜松市の自宅に訪問、「EO No.5A」取扱い説明書に出会った。ここでのインタビューや取説からエレクトーン音楽・製作に対する原点を見ることができた。これを通してこの楽器の今を見てみたい。

#### 1. インタビューと取扱い説明書

鱸真次氏へのインタビューと以下の取扱い説明書「EO No.5A」から以下のことが見えてくる。



- ・発売中止の理由 ⇒ オリジナルな楽器の開発
- ・オーケストラ楽器の音色をベースにした理由 ⇒ 持続音と減衰音を出せる新しい楽器を指向
- ・“電子楽器は演奏困難”の一般的イメージからの脱皮 ⇒ 鍵盤楽器経験者が容易に演奏できる楽器
- ・ソロと同時にアンサンブルにも適した楽器 ⇒ 代用楽器としての活用を示唆

\*ポスターセッション P-11 参照

ここから「音楽的フレキシビリティをもった」「新しいエレクトロニクス時代を見据えた」「オリジナリティをもった楽器製作」といったキーワードが浮かび上がってくる。

#### 2. 専門教育におけるエレクトーン音楽

1959年にエレクトーン第1号が発売されると、エレクトーン教室が主要都市に開設され、5年後の1964年にはエレクトーンコンクール、1967年にはエレクトーン演奏グレード、10年目の節目の1969年には学習者のためのエレクトーンメイトコースが次々と財団法人マハ音楽振興会の下で展開された。これは欧米に類をみないハードとソフトが一体化した世界初の音楽普及体制で、一大エレクトーンブームを作り上げた。

しかし1980年を境にその後の少子化時代やバブル崩壊後の需要減少傾向が現在も続いている。

1986年、音大やクラシック音楽界へのエレクトーン認知のため、全日本電子楽器教育研究会がヤマハ(株)バックアップの下で設立された。

ここでは、音大エレクトーン科に対する音楽の考え方として、次のような説明を行っていた。

- ・楽器のアイデンティティ ⇒ オリジナル作品
  - ・楽器の多様性 ⇒ スコアリーディング奏法
  - ・楽器のルーツ(歴史)研究 ⇒ オルガン作品
  - ・創作演奏 ⇒ R.グレイソン即興メソッドの応用
- \*1992「全日本電子楽器教育研究会」研究発表集特別寄稿(阿方 俊) 85p 参照

これらエレクトーン音楽に関する日本発信は、今や中国、台湾、韓国、シンガポールを経て欧米諸国でもエレクトーン科やスコアリーディング奏法に関心を示しはじめている。この分野で世界をリードしてきた日本では、「幻のエレクトーン」のキーワードを21世紀のテクノロジーの進化と社会の変化に対応した新しい視点から、再度、見直す時期が来ているのではなかろうか。